



今年4月24日に、国立科学博物館の新館（上野）がオープンした。その1階が「生物の多様性：海洋生物」というテーマで、海洋の生物環境を中心に展示を展開し、海藻を扱った展示も設けることができた<sup>\*1</sup>。今回はそのなかから「温帯の海」と「亜寒帯の海」の海中林のジオラマ展示を紹介し、会員諸賢の来館を乞いたい。

ご存知のように、従来博物館の展示において海藻は脇役に徹してきた。生物の分類展示では往々にして省かれ、ジオラマでは背景の一部に甘んじてきた。博物館が集客を重視すれば、クジラやラッコに比べて感情移入の難しい「退屈な」生物にスペースを割きにくいし、「得体の知れない」ものを取り上げて説明に窮するような危険も考慮しなければならない。そうした配慮の結果、知名度の高い有名生物ばかりを並べた展示室や、宝塚歌劇の舞台のように美しくすっきりとしたジオラマが相場である。しかし、この世界はスターだけで成り立っているわけではない。ラッコの食欲も、肉眼では見えない微生物から直接の餌になる魚介類まで揃って初めて満たされるのであって、それらを省いたジオラマは水族館の飼育室の再現と本質的に変わらない。陸の上で生活する人間になじみがなくとも、海藻は分類学的にも生態学的にもラッコより大きな存在であることを、どこよりもまず博物館の展示が語る必要がある。

そこで私たちは、漠然と海にすむ生物を並べるのではなく、温帯域と亜寒帯域からそれぞれのモデルとなる場所を選定し、現地ロケを行い、生きている生物環境を可能な限り忠実に再現した、ぐちゃぐちゃした生



図1. 採集されたカジメ（静岡県下田）。スケールは170cm。

## 北山太樹：海中林の展示 — 国立科学博物館の場合 —

物相を眺められるジオラマを制作することを構想した。大袈裟に表現すれば、太陽の光から魚の糞にいたるまで、海中林の濃密な一瞬間を切り取って上野に置くのが私たちの理想であった。

しかし、現実には甘くない。設計1年、施工1年というとんでもなく慌ただしいスケジュールに追いまわされ、現地調査と標本採取を同時に行うという離れ技を余儀なくされた。また、すべての海藻が大から小まで1点ずつ勘定されるので、採集・制作作業は実に困難なものとなった。ジオラマ全体が1点の作品だと思っていた私は、現地で途方にくれたものである。なんとか限りなく理想に前向きなジオラマの完成に辿りつくことができたのは、注文の多い施工を担当した株式会社丹青社や獅子奮迅の潜水活動をした株式会社日本海洋生物研究所の方々のおかげである。お礼申し上げたい。

### 「温帯の海」

暖流の影響を受ける太平洋岸にみられる海岸の潮間帯下部から漸深帯に至る岩場を想定した。1998年4月に静岡県下田市で現地ロケを行った。その際、当時の筑波大学下田臨海実験センター所長、横濱康継教授の強力な協力を得ることができ、潜水による私の鼻血以外は無事、調査・採集を完了した（図1）。

完成したジオラマはカジメの海中林が主役で、暖流系の多種多数の魚介類が脇役としてそこかしこに隠れ暮らしている（図2）。現地で潜ってみると実際のカジメ海中林の林内は暗く、見上げると海面の向こうの太陽の光が木漏れ陽のように「林冠」の隙間から差し込んでくる景観が強く印象に残った。そのイメージを活かそうと、鬱蒼とした「林冠」になるように高さを揃えたが、実際の「林床」の暗さを得るためにはもう少し本数が欲しいと今も思う。カジメの葉状部と附着器は実物を樹脂で加工したが、茎は脱水すると著しく細くなるのでビニール製である。もっとも悩んだのは色彩である。カジメの葉はチョコレートのような暗い褐色を呈しているのに、海中にあるときはそれが味噌のような明るい茶色に見える。あらかじめ明るい色調で彩色し、生きた色感が得られるようにした。

海中林の中を歩くオープン型ジオラマの構想もあったが、安全性の確保や標本のメンテナンスが困難なことから断念した。そのかわり、手前の床の一部が強化ガラスで、岩礁帯が切れて砂地になる辺りを上から見おろすことができる。ここには「寄り藻」のつもりでちぎれたカジメの葉を数片置いた。ロケ現場にはもっと多数の破片が見られたのだが、「藻屑」を予算化しなかったために十分な数を置けなかったのが悔やまれる。

カジメの他に以下の海藻を配置しているほか、擬岩には石灰藻の斑紋を丁寧に施した。緑藻：タマミル、ミル、褐藻：アカモク、アミジグサ、アラメ、ウミウチワ、オオバモク、サナダゲサ、ヒジキ、ヘラヤハズ、ワカメ、紅藻：エツキイワノカワ、ヒラガラガラ、ヒラクサ、マクサ、ユカリ。

前号で菊池則雄氏が紹介されたように、3月に開館した千葉県立中央博物館分館海の博物館もカジメ海中林の展示を行っている（第47巻第2号）。そのジオラマも見事な出来で、魚の背景としてではなく、生態系の主役として海藻を扱っている点は私たちの狙いと一致する。私は開館直前に知って肝を冷やしたが、ご覧になれる側にとっては比べる楽しみがあるのではないかと思う。

### 「亜寒帯の海」

寒流の影響を受ける北海道沿岸の潮間帯下部から漸深帯を想定した。1998年7月に北海道羅臼町でロケを行った。羅臼漁協の石亀正則氏の協力で、海藻類と魚介類の標本採取や写真、ビデオ撮影を行った。

オニコンブとアツバスジコンブからなるコンブ海中林を左側の岩礁に配置した（図3）。右側にはあえてコンブ類を置かず、白色の斑紋のある岩を並べて磯焼けの状態を表現した。アツバスジコンブ、オニコンブの他にも、次の海藻を配置したので、上野に寄られた際には探してみたい。褐藻：アナメ、エゾイ



図2.「温帯の海」(新館1階)

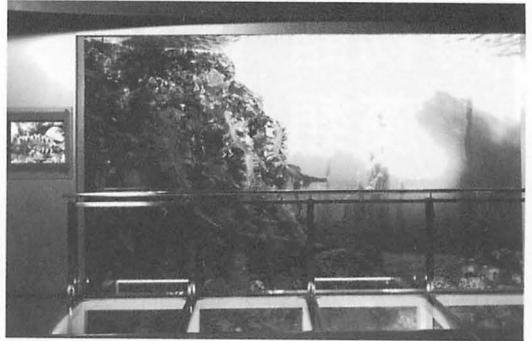


図3.「亜寒帯の海」(新館1階)

シゲ、ナガコンブ、ネコアシコンブ、ヒバマタ、紅藻：オキツバラ、カレキグサ、クシベニヒバ、クロハギナンソウ、ハケサキノコギリヒバ、フジマツモ。

このジオラマでは特に、コンブ類が海底に横臥して群生している様子を忠実に再現した。絵本からテレビまであらゆるメディアで、いまなお根強く描かれる、あの岩陰からすらりと立ち上がる緑色のコンブのイメージを修正する一助になれば幸いである。たとえば、最近中学校で使われている理科用教科書のなかには、カジメとマコンブが同じ場所に生えているかのようなイラストを載せているものがある（「新編新しい科学2分野」東京書籍）。それはまだ仕方ないとしても、マコンブが立ち上がって生えているかのように描かれているのはいただけない。まず、生きた海藻の正確な姿が社会に広く浸透しなければ、いくら海の問題を説いても、その深刻さを具体的にイメージできないのではないかと思う。我が国の子どもたちにとっては、海藻はいまやポケモンよりリアリティを欠いた存在かもしれない。海藻の名誉回復の願いを込めたジオラマである。

\*1このほかに、「ジャイアントケルプの海」、「海洋植物の多様性」の常設展示があります。

(国立科学博物館)

### 【国立科学博物館】

所在地：〒110-8718 東京都台東区上野公園 7-20

TEL：03-3822-0111(代)、FAX：03-5894-9898

インターネットホームページ：<http://www.kahaku.go.jp/>

交通：JR 上野駅公園口下車徒歩 5 分

開館時間：9:00～16:30（入館は 16:00 まで）

休館日：毎週月曜日（ただし、日曜日・月曜日が休日の場合は火曜日）・年末年始（12月28日～1月4日）・消毒休館日（春季・秋季）

入館料：大人 420 円、児童・生徒 70 円。